

# 東五十子城跡遺跡

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ移動通信  
用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

本庄市遺跡調査会

# 東五十子城跡遺跡

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ移動通信  
用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2004

本庄市遺跡調査会



## 序

埼玉県の北の玄関口である本庄市は、今春、上越・長野新幹線の本庄早稲田駅が開業し、県北部の交通の要衝として今後ますますの飛躍が期待されていますが、またその一方で、さまざまな開発に伴い、現在に至るまで長い年月をかけて形成されてきた伝統的な景観は、今日急激な変容を遂げようとしています。つとに知られるように、わが本庄市の歴史は非常に古く、江戸時代には中山道最大の宿場町として大いに繁栄し、また中世においては武蔵七党の中で最大の勢力を誇った児玉党の拠点であり、古代には広大な条里水田が整備され、重要な農業生産基盤としての役割を果たしていました。このような歴史的背景をもつ本庄市は埋蔵文化財にもめぐまれ、本庄台地や大久保山丘陵を中心に、旧石器時代から近世まで時代幅も広く、幾多の重要な遺跡が分布しています。

本書に報告する東五十子城跡遺跡は、古墳時代中期の良好な集落遺跡として著名であり、早くも昭和31年に第1次の発掘調査が実施されるなど学史上も重要な遺跡として位置付けられています。またこの遺跡は、15世紀後半に勃発した上杉氏と古河公方の抗争に際し、上杉方が構築した「五十子陣」の中心部分に該当することが想定されています。「五十子陣」については、近年の考古学的な調査によって部分的ながら、ようやくその構造が解明されつつありますが、今回の調査においても、関連する遺構・遺物が検出され、「五十子陣」の実態究明に向けてまたひとつ貴重な成果をあげることができました。今後は、本書が学術研究をはじめ、学校教育、生涯学習の場に広く活用されますとともに、将来の埋蔵文化財保護に役立てられることを希望する次第です。

最後になりましたが、本庄市の文化財保護行政に格別のご理解を賜り、なおかつ現地発掘調査から、資料の整理調査さらには本書の刊行に至るまで多大なご協力を頂戴した株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ様には、ここにあらためて深甚の謝意を表する次第です。また、調査に際してご指導、ご教示を賜りました方々、現地調査で直接作業の労にあられた皆様に衷心より感謝を申し上げます。

平成16年5月

本庄市遺跡調査会

会長 福 島 巖



## 例 言

1. 本書は埼玉県本庄市大字東五十子城跡747番 4 他に所在する東五十子城跡遺跡の発掘調査の報告書である。
2. 調査は株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモが計画する移動通信用鉄塔建設にともない、事前の記録保存を目的として本庄市遺跡調査会が実施したものである。
3. 発掘調査は東五十子城跡遺跡の217.09㎡を対象として実施した。
4. 発掘調査期間は以下のとおりである。  
自 平成15年12月3日  
至 平成15年12月24日
5. 発掘調査担当者は以下のとおりである。  
本庄市遺跡調査会 調査員 太田博之  
同 松本 完  
同 町田奈緒子
6. 発掘調査に関係する基準点測量は(株)昭和に委託した。
7. 整理調査期間は以下のとおりである。  
自 平成15年12月25日  
至 平成16年5月20日
8. 整理調査担当者は以下のとおりである。  
本庄市遺跡調査会 調査員 太田博之
9. 整理調査は有限会社毛野考古学研究所に委託した。
10. 本書の執筆はⅠを本庄市教育委員会事務局が、Ⅱ～Ⅴを有限会社毛野考古学研究所調査部主任調査研究員常深尚が担当した。
11. 本書の編集は常深尚が担当した。
12. 本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。
13. 発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます。(順不同・敬称略)  
荒川正夫 大熊季広 金子彰男 車崎正彦 恋河内昭彦 昆 彭生 坂本和俊 清水 豊  
杉山晋作 鈴木徳雄 外尾常人 田村 誠 徳山寿樹 鳥羽政之 長井正欣 中沢良一  
中島直樹 長瀬歳康 日高 慎 深澤敦仁 松澤浩一 丸山 修 矢内 勲

14. 東五十子城跡遺跡の発掘調査、整理調査及び報告書刊行にかかる本庄市遺跡調査会の組織は以下のとおりである。

・平成15年度 発掘調査、整理調査

会	長	福島 巖 [本庄市教育委員会教育長]
理	事	揖斐 龍一 [本庄市教育委員会事務局長 (会長代理)]
	同	柴崎三起雄 [本庄市文化財保護審議委員]
	同	野村 廣久 [ 同 ]
監	事	亀田 能紀 [本庄市行政委員会事務局長]
		斉藤 貞子 [本庄市会計課長]
幹	事	吉田 敬一 [社会教育課長]
		桜場 幸男 [社会教育課長補佐]
		吉田 稔 [社会教育課文化財保護係長]
		太田 博之 [社会教育課文化財保護係主査]
		我妻 浩子 [社会教育課文化財保護係主査]
		松本 完 [社会教育課臨時職員]
		町田奈緒子 [ 同 ]
調	査	員 太田 博之 [社会教育課文化財保護係主査]
		松本 完 [社会教育課臨時職員]
		町田奈緒子 [ 同 ]

・平成16年度 整理調査、報告書刊行

会	長	福島 巖 [本庄市教育委員会教育長]
理	事	揖斐 龍一 [本庄市教育委員会事務局長 (会長代理)]
	同	柴崎三起雄 [本庄市文化財保護審議委員]
	同	野村 廣久 [ 同 ]
監	事	八木 茂 [本庄市行政委員会事務局長]
		堀口恭仁子 [本庄市会計課長]
幹	事	吉田 敬一 [社会教育課長]
		桜場 幸男 [社会教育課長補佐]
		上野 良一 [ 同 ]
		吉田 稔 [社会教育課文化財保護係長]
		斉藤みゆき [社会教育課文化財保護係主査]
		太田 博之 [社会教育課文化財保護係主査]
		松本 完 [社会教育課臨時職員]
		逆井 洋美 [社会教育課臨時職員]
調	査	員 太田 博之 [社会教育課文化財保護係主査]
		松本 完 [社会教育課臨時職員]
		逆井 洋美 [ 同 ]

## 凡 例

1. 本書所収の遺跡全測図におけるX・Y座標値は国土標準座標第IX系に基づく。各遺構における方位針は座標北を示す。
2. 本調査における各種遺構名称は下記の記号で示し、本書掲載の本文、挿図、写真図版中の遺構名称も同一の記号で記述した。  
SI…竪穴住居 SD…溝 SK…土壇 P…ピット
3. 本書掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は、原則的に以下のとおりである。  
[遺構図]  
遺跡全測図…1:100 SI…1:60 SD…1:80 SK…1:60  
[遺物実測図]  
縄文土器…1:2 弥生土器…1:2 土師器…1:4 須恵器…1:4 かわけ…1:4  
陶器…1:4 土製品…1:2 石製模造品…1:2 石器…1:3 板碑…1:4  
銅製品…1:1、1:2 鉄製品1:2
4. 遺構断面図の水準数値は海拔を示す。単位はmである。
5. 遺構図・遺物実測図中のトーンを示す内容は以下のとおりである。
  - a. 遺構断面図中の斜線は基本層序のIII層～VII層を、トーンはVIII層を示す。
  - b. かわけ実測図の黒ベタは黒色を呈するタール状煤の付着範囲を示す。
  - c. 古瀬戸実測図のトーンは灰釉の範囲を示す。
6. 遺物観察表中の単位は、法量はcm、重さはgである。( )内の数値は推定値を示す。
7. 本書掲載の地形図は、国土交通省国土地理院発行1/25,000「本庄」、位置図は本庄市都市計画図1/2,500「19」に加筆したものを用了。



# 目 次

本庄市遺跡調査会会長 福島 巖

序

例言

凡例

目次

I	調査に至る経過	1
II	遺跡の環境	2
1	地理的環境	2
2	歴史的環境	2
III	調査の方法と経過	4
1	調査の方法	4
2	調査の経過	4
IV	調査の成果	5
1	遺跡の概要	5
2	検出された遺構と遺物	7
(1)	竪穴住居	7
(2)	溝	10
(3)	土壇・ピット	14
(4)	遺構外出土遺物	19
V	まとめ	22

写真図版

抄録

## 挿図目次

図1 埼玉県地形図	2	図11 SD-01出土遺物(2)	13
図2 周辺の遺跡	3	図12 SK (1)	15
図3 遺跡位置図	4	図13 SK (2)	16
図4 基本層序	5	図14 SK (3)	17
図5 東五十子城跡遺跡全測図	6	図15 SK-08	18
図6 SI-01	7	図16 遺構外出土遺物(1)	19
図7 SI-02	8	図17 遺構外出土遺物(2)	20
図8 SI-02出土遺物	9	図18 胴部に隆帯を有する土師器壺の類例	22
図9 SD-01	11	図19 五十子城跡	22
図10 SD-01出土遺物(1)	12		

## 写真図版目次

写真図版1 東五十子城跡遺跡と周辺の地形	写真図版8 SK-06
写真図版2 遺跡西側全景	SK-07
遺跡東側全景	写真図版9 SK-08
写真図版3 SI-01	SK-08
SI-02	写真図版10 SI-02出土遺物
SI-02 掘り方	写真図版11 SD-01出土遺物①
写真図版4 SI-02 遺物検出状況	写真図版12 SD-01出土遺物②
SI-02 遺物検出状況	SK-01出土遺物
SI-02 貯蔵穴	SK-02出土遺物
写真図版5 SD-01	SK-03出土遺物
SD-01 セクション	写真図版13 SK-05出土遺物
SD-01 遺物検出状況	SK-06出土遺物
写真図版6 SD-01 遺物検出状況	SK-07出土遺物
SD-01 遺物検出状況	SK-08出土遺物
写真図版7 SK-02	遺構外出土遺物①
SK-03	写真図版14 遺構外出土遺物②
SK-05	



## I 調査に至る経過

平成15年10月31日付けで、東京都千代田区水田町2丁目11番1号株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモネットワーク本部ネットワーク建設部長西山剛氏から、本市市大字東五十子744番地タツムテクノロジー株式会社が所有する本市市大字東五十子城跡747番4、746番3の各一部218.3㎡の土地に移動通信用鉄塔を建設する計画があり、これにかかる「埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」の照会が本市市教育委員会に提出された。本市市教育委員会が埼玉県教育委員会発行の『本市市遺跡分布地図』をもとに同地の埋蔵文化財包蔵地の有無を調査したところ、当該の事業計画地には、周知の埋蔵文化財包蔵地東五十子城跡遺跡(53-035)が所在することが判明した。東五十子城跡遺跡は昭和31年の第1次調査以来数次の調査が実施され、古墳時代を中心とする集落遺跡として知られていた。また、同事業計画地周辺は15世紀後半の軍事施設である「五十子陣」の中心部にも近く、これに関係する遺構の存在も十分に予測された。

本市市教育委員会では、以上のような状況をふまえ、当該事業計画地について、埋蔵文化財の試掘調査を実施することとし、平成15年11月11日、現地調査を実施した。その結果、当該埋蔵文化財包蔵地において、古墳時代中期の住居跡の存在を確認し、土師器・甕・台付甕等の遺物を検出した。また、遺構は検出されなかったものの、少量のかわかけ片も出土したことから、付近に「五十子陣」関連の遺構の所在する可能性が考えられた。

本市市教育委員会では、以上の試掘調査の結果をもとに、平成15年11月12日付け本教社発第226号で「埋蔵文化財の所在および取扱いについて」の回答を事業者あて送付し、1.協議のあった土地については周知の埋蔵文化財包蔵地である東五十子城跡遺跡(53-035)が所在することから現状保存が望ましいこと、2.やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第57条第1項、同第99条第3第1項及び文化財保護法施行令第5条第2項の規定に基づき埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財発掘の届出を提出すること、3.埋蔵文化財発掘の届出を提出の後は埼玉県教育委員会の指示に従い、当該埋蔵文化財の保護に万全を期すこと、4.本回答後は関係機関との協議を徹底することの旨を伝達した。

その後の協議の結果、他に移動通信用鉄塔建設の適地がなく、建造物の性格上、現状保存も不可能であることから、当該埋蔵文化財については、本市市遺跡調査会が調査主体となり、発掘調査を実施して記録保存の措置をとることとなった。

発掘調査のための手続きは、平成15年11月25日付けで、事業者から文化財保護法第57条第2第1項、同第99条第3第1項及び文化財保護法施行令第5条第2項の規定による埋蔵文化財発掘の届出が提出され、本市市教育委員会ではこれを受けて、平成15年11月25日付け本教社発第240号で埋蔵文化財発掘届の取扱いについての副申を添え、同届出を平成15年11月25日付け本教社発第239号で埼玉県教育委員会あて送達した。また、平成15年11月25日付け本道発第1号で本市市遺跡調査会から埋蔵文化財発掘調査の届出が提出され、本市市教育委員会ではこれを受けて、平成15年11月25日付け本教社発第241号で埼玉県教育委員会あて送達した。

現地における発掘調査は平成15年12月3日から平成15年12月24日までの期間で実施した。

## II 遺跡の環境

### 1 地理的環境

東五十子城跡遺跡は本庄台地の北東端に位置する。遺跡の北側には東流する女堀川の侵食により段丘崖が形成され、その北方には利根川の低地帯が広がる。台地の南縁には小山川が流れ、遺跡の南東800m地点で志戸川と合流している。これにより遺跡周辺は、北・東・南の三方を河川の段丘崖に画された自然の要害地となる。地表面の標高は約48mを測り、段丘崖の比高差は3～7mである。

### 2 歴史的環境

本遺跡周辺では主に古墳時代、奈良・平安時代、中世の遺跡が分布している。

古墳時代では、西五十子古墳群(7)で4～5世紀、昭和31年・36年調査の東五十子城跡遺跡(1)で5世紀後半の集落が確認されている。なかでも本遺跡と同一集落を形成するとみられる東五十子城跡遺跡(1)では、豊富な鉄製農具(斧、鍬、鎌、鋳)や玉類(勾玉、管玉、白玉)、砥石、紡錘車を出土する住居が調査され、本遺跡との関連が注目される。また諏訪新田遺跡(1)、御堂坂遺跡(2)、薬師堂遺跡(4)、六反田遺跡(6)、稻荷前遺跡(7)、大寄A遺跡(8)、大寄B遺跡(9)、西浦北遺跡(20)、宮西遺跡(21)、東五十子・川原町遺跡(22)では、5世紀以降、奈良・平安時代までの集落が確認されている。古墳は、中期前半を遡る可能性がある前山1号墳(10、前方後円墳)が最も古く、中期前半の前山2号墳(10、方墳)、B種コホケ調整の円筒埴輪を有する塚合古墳群(15、古式群集墳)へと続く。埴輪窯跡は赤坂埴輪窯跡(2)、有勝寺北裏埴輪窯跡(9)が知られる。

中世の15世紀には当地に関東管領上杉氏によって陣が構えられ、五十子陣と呼ばれている。陣は東五十子から西五十子にかけて広範囲に展開し、本遺跡周辺はその中核部と推定されている。この時期の遺構・遺物は東五十子赤坂遺跡(3)、西五十子大塚遺跡(5)、西五十子古墳群(7)、東本庄遺跡(8)、東五十子・川原町遺跡(22)で調査され、西五十子台遺跡(6)では板碑と宝篋印塔で囲われたなかから、焼土・灰、かわらけが出土している。

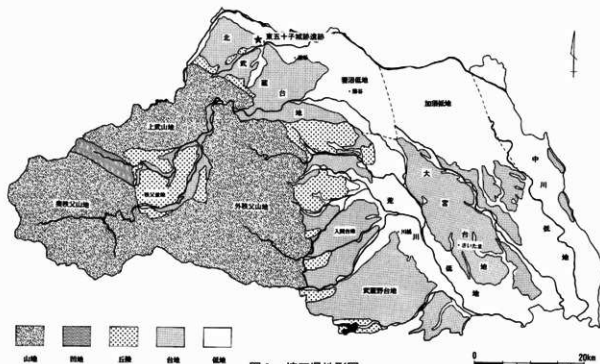
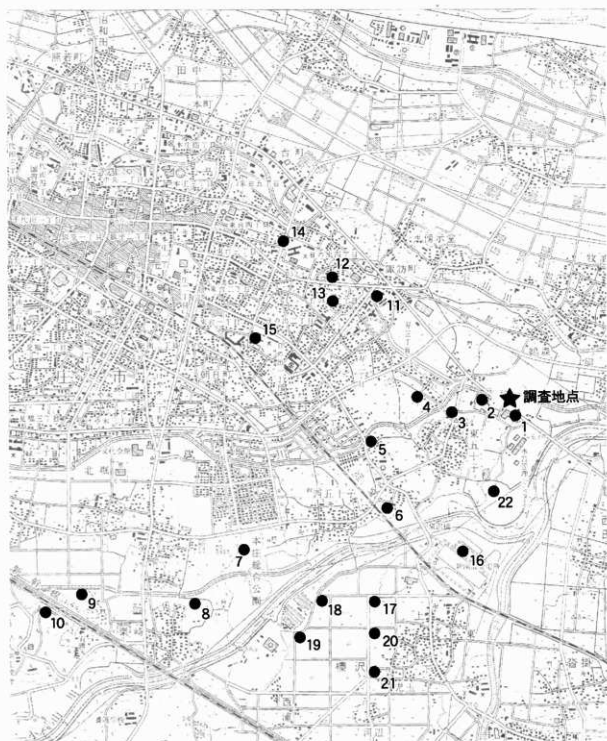


図1 埼玉県地形図



1. 東五十子城跡遺跡 2. 赤坂壇輪窓跡 3. 東五十子赤坂遺跡 4. 鶴森古墳群 5. 西五十子大塚遺跡  
 6. 西五十子台遺跡 7. 西五十子古墳群 8. 東本庄遺跡 9. 宍勝寺北裏壇輪窓跡 10. 前山1・2号墳  
 11. 諏訪新田遺跡 12. 御堂坂遺跡 13. 御堂坂古墳群 14. 薬師堂遺跡 15. 塚合古墳群 16. 六反田遺跡  
 17. 船荷前遺跡 18. 大寄A遺跡 19. 大寄B遺跡 20. 西瀬北遺跡 21. 宮西遺跡 22. 東五十子・川原町遺跡

図2 周辺の遺跡 (1:25,000)

### Ⅲ 調査の方法と経過

#### 1 調査の方法

発掘調査は、調査区を東西に二分し、西側を先行した。調査区の全周には防護柵を設置した。遺構確認までの表土は重機を用いて掘削し、人力で遺構の確認と調査を行った。現地実測の基準として、方眼基準杭と水準点を設置し、遺構平面図・遺物分布図・土層断面図は手実測により1/10ないし1/20で作成した。遺構の写真撮影には、35mmモノクロ・カラーネガ・リバーサル、6×7モノクロの各フィルムとデジタルカメラを使用した。出土遺物の注記はインクジェットを使用し、遺跡名は53-035とした。接合にはセメダインC、復元にはエポキシ系樹脂を使用した。遺物の写真撮影には35mmモノクロ、6×7モノクロの各フィルムを使用した。

#### 2 調査の経過

発掘調査は平成15年12月3日から平成15年12月24日にかけて実施した。12月中旬に西側から東側へ調査区を移行した。遺構調査終了後、調査区を埋め戻して事業者側へ引き渡しを行った。整理調査は平成15年12月25日から平成16年5月20日にかけて実施し、平成16年5月25日付けで報告書を発行した。

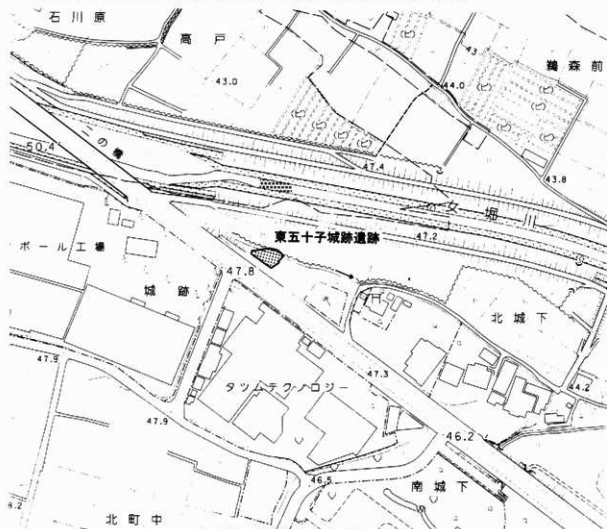


図3 遺跡位置図 (1:2,500)

## IV 調査の成果

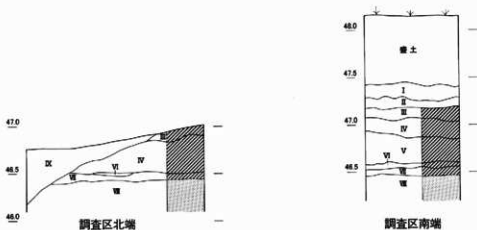
### 1 遺跡の概要

本遺跡は台地北側の縁辺部にあつて、北側には女堀川の河道に面した崖が形成される。遺構の確認面はローム層(Ⅲ層)上面である(図4)。本遺跡ではローム層は厚さ15cmほどしか存在せず、下部には鉄分沈着の顕著な灰白色粘質土が幾層も堆積する。とくにⅣ層は窯業に適した良質の粘土であり、本遺跡の土壌にはこの粘土の採掘を意図したと推測されるものが存在する(SK-07・08)。

検出された遺構は竪穴住居2軒、溝1条、土壇8基、ピット12基である。竪穴住居のSI-02は古墳時代中期の土師器を出土し、昭和31年、同36年の調査で検出された住居群に連なるものである。またSI-02を始めとする各遺構の覆土中に古墳時代前期の土師器片が一定量含まれることから、周辺に古墳時代前期の遺構が存在すると推定される。遺構外14の土師器壺は胴部に隆帯を貼り付けたもので、類例の少ない貴重な資料である。

溝と土壇からはかわらけを主体に、片口鉢、古瀬戸、板碑、銅銭などが出土している。遺物の大半が中世の15世紀代を示し、五十子陣跡との関連が考えられる。

このほか少量ではあるが、縄文土器、弥生土器、古代の土師器・須恵器などが出土している。



#### 基本層序

- |      |       |                        |
|------|-------|------------------------|
| I    | 黒色土   | ローム粒、ロームブロックを少量含む。     |
| II   | 黒色土   | ロームブロックを多量に含む。         |
| III  | 明黄褐色土 | ローム層。                  |
| IV   | 灰白色土  | 粗砂質。鉄分沈着が顕著。           |
| V    | 灰黄色土  | 鉄分沈着が顕著。褐鉄鉱を少量含む。      |
| VI   | 灰白色土  | 粘土質。鉄分沈着が顕著。褐鉄鉱を少量含む。  |
| VII  | 浅黄色土  | 粘土質。鉄分沈着が顕著。褐鉄鉱を多量に含む。 |
| VIII | 灰白色土  | 粘土質。鉄分沈着が顕著。褐鉄鉱を少量含む。  |
| IX   | 褐灰色土  | ロームブロック、小石、白色粘土粒を少量含む。 |

図4 基本層序



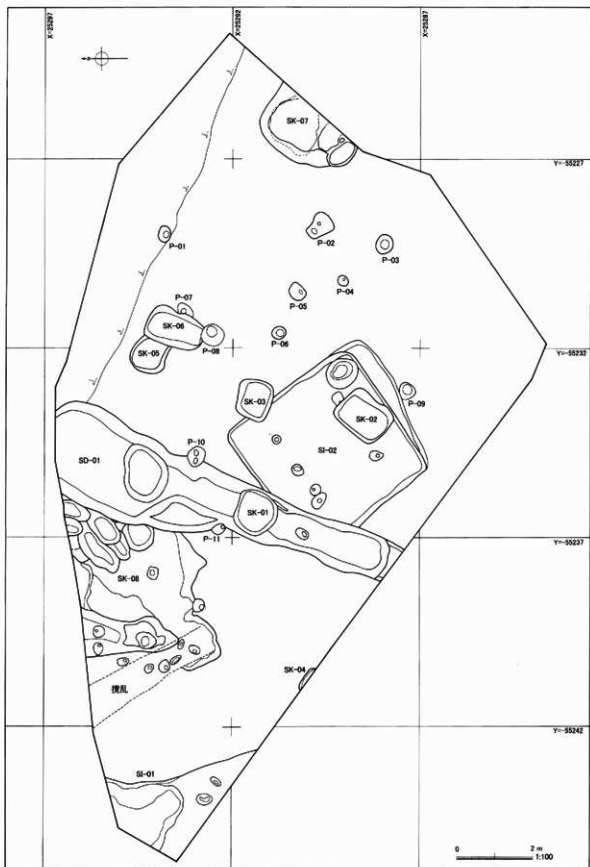


图5 东五十子城跡遺跡全測図

## 2 検出された遺構と遺物

### (1) 竪穴住居

検出された竪穴住居は2軒である。SI-02からは古墳時代中期の土師器が出土し、昭和31年、同36年の調査で検出された住居群に連なるものと想定される。

#### SI-01 (図6)

位置：調査区の西隅に位置する。

形状：住居東側の一部のみ検出され、ほぼ床面が露出した状態であった。東壁は約4.1m残存し、方位はN-20°-Wを指す。規模や形状は明らかでない。

構造：床面は硬化していた。東壁沿いには深さ13cmほどの窪みがあり、掘り方とみられる。本住居は床面に焼土や炭化物が多く認められることから、焼失住居と考えられる。

遺物：確認面で若干の土師器が出土したが、本住居に伴うと判断されるものはなかった。

時期：不明である。

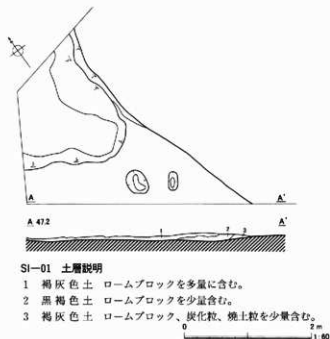


図6 SI-01

#### SI-02 (図7・8)

位置：調査区の中央に位置する。SD-01、SK-2、SK-3と重複し、いずれよりも古い。

形状：西隅をSD-01に切られるが、一辺4.0mの方形を呈すると考えられる。南東壁には最大幅50cmの張り出しが存在するが、これは住居の建て替えによる可能性が考えられる。北東壁の方位はN-35°-Wを指す。

構造：覆土は炭化粒を多く含む黒褐色土を主体とする。床は黒褐色土とロームブロックによる貼床を施す。掘り方の深さは10~15cmである。床面は平坦だが、硬化部分は検出されなかった。確認面から床面までの深さは20~25cmを測る。ピットは7基検出され、主柱穴はP1・P2・P4（あるいはP5）・P6の4基が想定される。P3は主柱穴の中間に位置する補助的な柱穴であろうか。貯蔵穴は東隅のP7と考えられる。カマドや炉跡は検出されなかった。

遺物：床面直上において土師器の甕1個体(6)、埴2個体(2・3)、高環の脚部1点(4)が出土した。甕(6)の周囲からは灰の散布がわずかに確認されたほか、剣形模造品1点(12)が出土した。覆土からは縄文・弥生土器片や、古墳時代前期から後期にかけての土師器片などが出土している。

時期：床面で出土した土師器は古墳時代中期の和泉式土器と判断される。

#### SI-02 ピット計測表

単位：cm

番号	P 1	P 2	P 3	P 4	P 5	P 6	P 7
規模	24×22	(39)×29	33×29	29×26	46×30	35×29	86×78
深さ	53	53	27	45	41	50	51

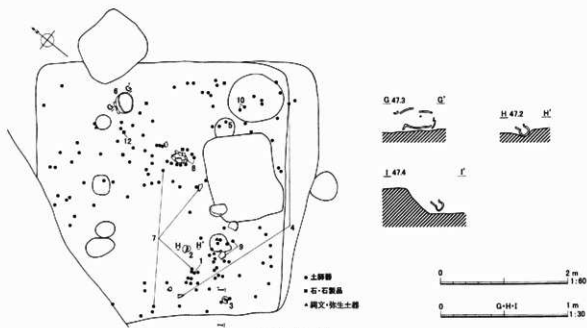
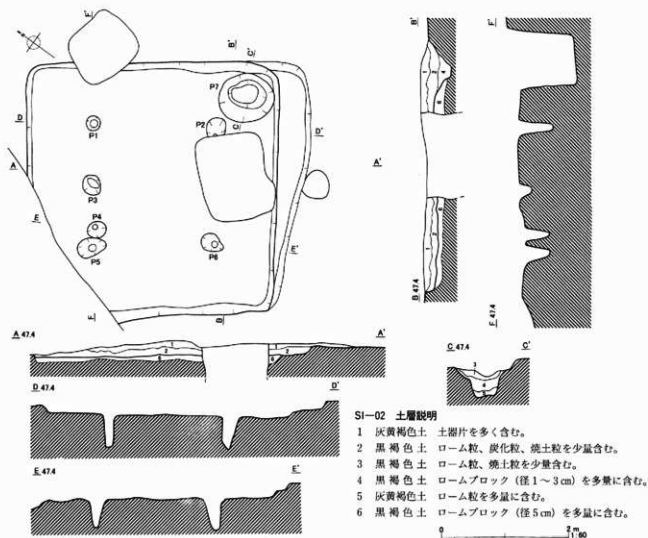


図7 SI-02

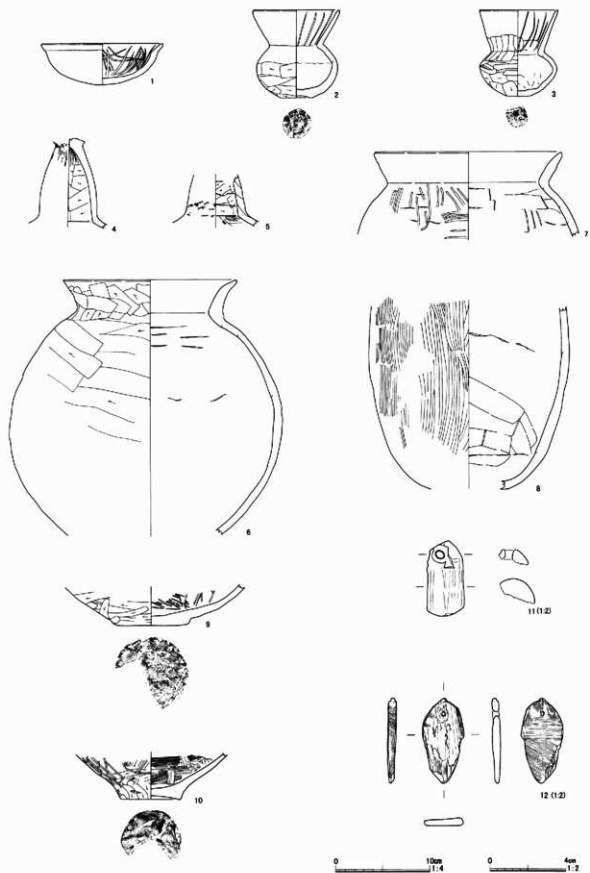


图8 SI-02出土遗物

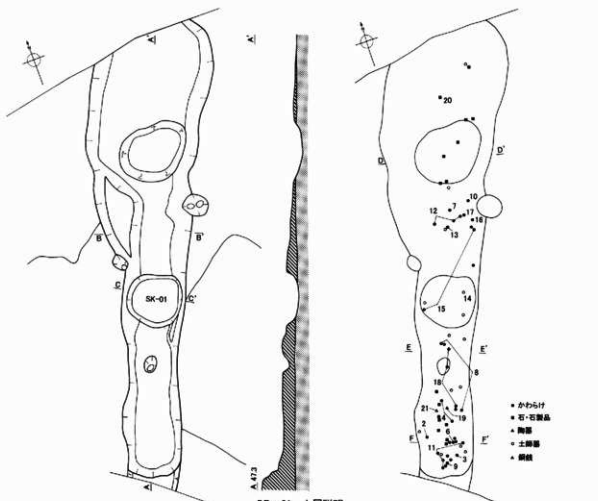
## SI-02

No.	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	土師器 環	口径(12.9) 底径— 器高4.4	丸底。体部は彎曲し、口縁部は短く外傾。	外面—口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ、口縁部～底部ヘラケンマ。	片岩・チャート 内外一褐色	1/4残存。 床上10cm。
2	土師器 埴	口径9.2 底径3.1 器高9.3	平底。膨らみをもつ胴部中に最大径。口縁部は直線的に開く。	外面—口縁部ヨコナデ後ヘラケンマ、胴部上半ヘラケンマ、胴部下半～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ後ヘラケンマ、胴部～底部ユビナデ。	雲母・角閃石・白色粒 内外一褐色	ほぼ完成。 床直。
3	土師器 埴	口径8.2 底径2.3 器高9.1	平底。膨らみをもつ胴部中に最大径。口縁部は直線的に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、頸部ヘラナデ、胴部～底部ヘラケズリ。内面—口縁部ヨコナデ後ヘラケンマ、頸部ヘラナデ、胴部～底部ユビナデ。	雲母・白色粒 内外一褐色	口縁部1/2欠。 床直。
4	土師器 高環	口径— 底径— 器高—	脚部下に膨らみをもつ。	外面—脚部上位ハケメ、器部ヨコナデ。内面—脚部ヘラケズリ、上位紋目、器部ヨコナデ。	白色粒・黒色粒 内外一明赤褐色	脚部1/3残存。 床直。
5	土師器 高環	口径— 底径— 器高—	脚部粘土組織み上げ成形。脚部下にわずかに膨らみをもつ。	外面—脚部下位ハケメ、器部ヨコナデ。内面—脚部ヘラケズリ、器部ヘラナデ。	雲母 内外一褐色	脚部下半1/2残存。 床上20cm。
6	土師器 壺	口径18.5 底径— 器高—	粘土組織み上げ成形。胴部中に膨らみをもつ。口縁部は彎曲気味に外反。	外面—口縁部ヨコナデ、頸部～胴部ヘラケズリだが摩滅著しい。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデだが摩滅。	角閃石・白色粒・赤褐色粒・裸内 面一褐色 外面一 にぶい赤褐色	口縁部～胴部 2/3残存。 床直。
7	土師器 壺	口径(20.0) 底径— 器高—	粘土組織み上げ成形。口縁部は直線的に開く。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ後一部ヘラケンマ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ。	角閃石・チャート 内面一にぶい褐色 外面一にぶい褐色	口縁部～胴部 1/8残存。 床上5cm。
8	土師器 壺	口径— 底径(8.0) 器高—	粘土組織み上げ成形。胴部中にわずかに膨らみをもつ。	外面—胴部ハケメ。内面—ヘラナデ。	角閃石・チャート 内面一にぶい黄褐色 外面一にぶい褐色	胴部～底部1/ 3残存。 床上10cm。
9	土師器 壺	口径— 底径8.0 器高—	胴部大きく膨らむ。	外面—胴部～底部ヘラケズリ。内面—胴部～底部ヘラナデ、胴部ヘラ先状工具痕顕著。	雲母・赤褐色粒 内面一にぶい赤褐色 外面一褐色	胴部下端～底部 3/4残存。 床直。
10	土師器 壺	口径— 底径6.4 器高—	胴部大きく膨らむ。	外面—胴部ヘラケズリ後ハケメ及びヘラケンマ、底部ヘラケズリ。内面—胴部～底部ヘラケズリ及びハケメ。	雲母・赤褐色粒 内面一褐色 外面一にぶい褐色	胴部下端～底部 2/3。 床上10cm。
11	土製品	長さ(4.0) 幅(2.0) 厚さ(1.3) 孔径0.4 重さ7.98g				覆土中。
12	新形模造品	長さ4.0 幅2.3 厚さ0.4 孔径0.2 重さ6.42g				床直。蛇紋岩。

## (2) 溝

## SD-01 (図9・10-11)

調査区の中央部に位置する。SI-01及びSK-08と重複し、いずれよりも新しい。溝は南西から北東へ直線的に伸び、北東端は崖となっている。南西端は急角度で立ち上がっており、溝が途切れるか、あるいは土橋状に掘り残されたものと考えられる。方位はN-20°-Eを指す。上幅は南西部では1.1mであるが、北東部では最大2.5mと広がる。下幅も同様に南西部で0.7mだが、北東部では1.8mと広がる。断面形は箱薬研状であるが、北東部では西壁の立ち上がりが緩やかとなる。南西部の底面は平坦であるが、北東部では崖に向かって緩やかに低くなっている。残存深度はおおむね50cmを測る。覆土は褐色灰色土を主体とし、上層には灰白色砂質土ブロックが混入する。SK-01・02・03・05・06と似た覆土である。遺物は南北の2箇所に集中地点が認められ、両地点あわせて20個体以上のかわらけが出土した。油煙の付着したかわらけは1点(14)だけであった。また南側では片口鉢(19)や皇宋通寶(21)、北側では板碑(20)も出土した。所属時期は、出土遺物の型式から15世紀代と判断される。



SD-01 土層説明

- 1 灰 色 土 ロームブロック (径1cm) を多量に、炭化粒、焼土粒、灰白色砂質土ブロック (径2cm) を少量含む。
- 2 褐 灰 色 土 ロームブロック (径1cm)、炭化粒、焼土粒を少量含む。
- 3 ロームブロック
- 4 褐 灰 色 土 シルト質。ローム粒を多量に、炭化粒を少量含む。

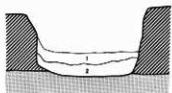
SK-01 土層説明

- 1 褐 灰 色 土 ロームブロック (径1cm)、炭化粒、焼土粒を少量含む。
- 2 褐 灰 色 土 粘土質。ロームブロック (径1cm)、炭化物を少量含む。

B.473 B



D.473 C'



E.473 E'



D.473 D'



F.473 F'



0 2m  
1:20

0 B~F 1m  
1:40

図9 SD-01

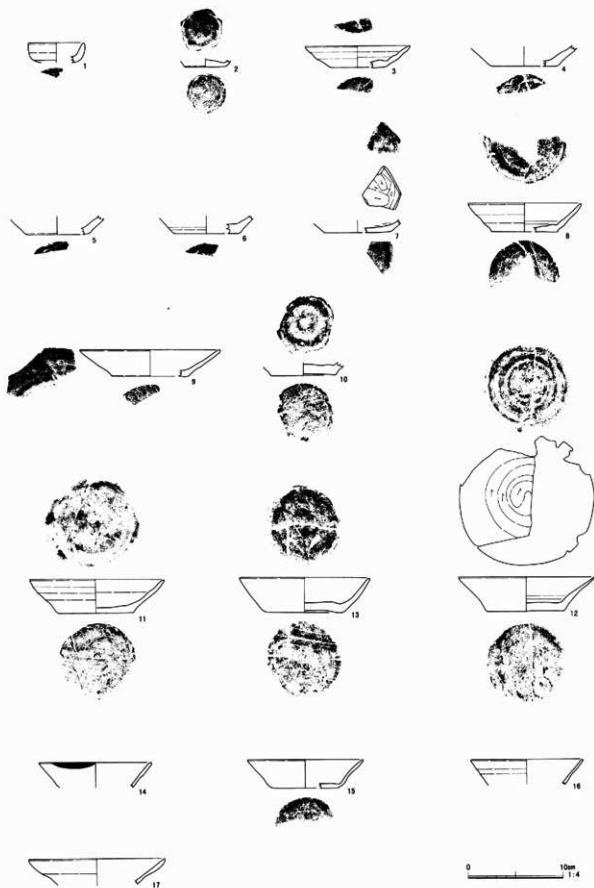


图10 SD-01出土遗物(1)

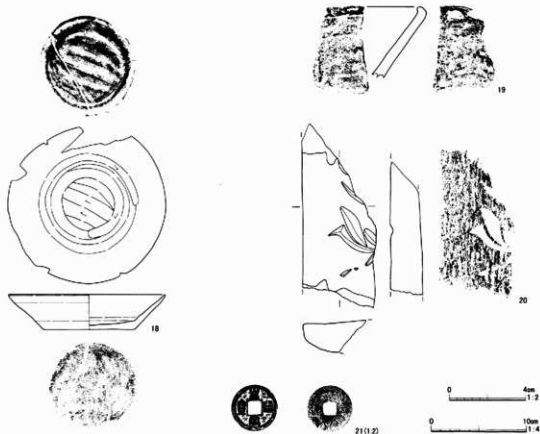


図11 SD-01出土遺物(2)

SD-01

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 (5.8) 底径 — 器高 —	口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部ロクロ整形。	黒色粒・赤褐色粒 内外一にぶい黄褐色	1/6残存。
2	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 4.5 器高 —	糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。見込み周縁部窪む。	底部左回転糸切り。見込み螺旋状ロクロ目。	チャート・赤褐色粒 内外一にぶい橙色	口縁部～体部欠。
3	中世土器 かわらけ	口径 (11.2) 底径 (6.0) 器高 2.2	口縁部直線的に立ち上がり、端部はわずかに外反する。見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	石英・赤褐色粒 内外一にぶい黄褐色	1/6残存。
4	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (7.2) 器高 —	体部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形。	チャート 内外一にぶい黄褐色	体部～底部1/5残存。
5	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (7.0) 器高 —	糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	チャート 内外一にぶい黄褐色	体部～底部1/8残存。
6	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (7.0) 器高 —	体部は直線的に立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	雲母・赤褐色粒 内外一にぶい橙色	体部～底部1/7残存。
7	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (7.2) 器高 —	体部は内彎気味に立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。見込み中央は直線的なユビナデ。	雲母・赤褐色粒 内外一にぶい橙色	体部～底部1/5残存。
8	中世土器 かわらけ	口径 (12.0) 底径 (7.0) 器高 3.0	口縁部は内彎気味に立ち上がる。糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。見込み螺旋状ロクロ目。	雲母・赤褐色粒 内外一橙色	1/3残存。
9	中世土器 かわらけ	口径 (15.0) 底径 (8.0) 器高 (2.8)	口縁部は直線的に立ち上がる。糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。体部外面に指頭痕。	チャート・赤褐色粒 内外一にぶい橙色	1/8残存。



## SD-01

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
10	中世土器 かわらけ	口径— 底径 7.0 器高—	糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り後に、板状圧痕。見込み螺旋状ロクロ目か。	チャート・赤褐色粒 内外— 黄褐色	底部5/6残存。
11	中世土器 かわらけ	口径— 底径— 器高—	口縁部は内湾気味に立ち上がる。内面体部と底部の境不明瞭。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り後に、板状圧痕。	雲母・チャート・赤褐色粒 内面— 褐色 外面— い褐色	3/4残存。
12	中世土器 かわらけ	口径 14.2 底径 8.2 器高 3.6	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。見込み螺旋状ロクロ目。	角閃石・赤褐色粒 内外— い褐色	口縁部1/3欠。
13	中世土器 かわらけ	口径 (14.0) 底径 8.4 器高 3.7	口縁部は直線的に立ち上がる。見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り後に、板状圧痕。	白色パミス・赤褐色粒 内外— い褐色	口縁部3/4欠。
14	中世土器 かわらけ	口径 (12.0) 底径— 器高—	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	体部ロクロ整形。	白色粒 内外— い褐色	口縁部～体部1/4残存。
15	中世土器 かわらけ	口径 (12.4) 底径 (7.0) 器高 3.0	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	雲母・赤褐色粒 内外— い褐色	1/4残存。
16	中世土器 かわらけ	口径 (12.0) 底径— 器高—	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	体部ロクロ整形。	雲母・片岩・赤褐色粒 内外— い褐色	口縁部1/4残存。
17	中世土器 かわらけ	口径 (14.6) 底径— 器高—	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。	体部ロクロ整形。	雲母・チャート・赤褐色粒 内外— い褐色	口縁部～体部1/4残存。
18	中世土器 かわらけ	口径 16.7 底径 9.8 器高 3.7	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で外反する。見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。見込み中央は直線的なユビナデ。	雲母・チャート・角閃石・白色粒・赤褐色粒 内外— い褐色	ほぼ完形。
19	片口鉢	口径— 底径— 器高—	体部は直線的に開き、口縁端部短く内湾する。	内外面ナデ。口縁部外面被熱。	雲母・チャート・赤褐色粒 内面— い褐色 外面— い褐色	口縁部～体部小片。
20	板	磚 残存長10.0 残存幅7.9 厚さ3.4 重さ727.80g				緑泥片岩。
21	網	鉄 径2.5 厚さ0.1 孔径0.7 重さ2.53g				皇宋通貨。

## (3) 土壌・ビット (図12～15)

8基の土壌と12基のビットを確認した。SK-01・02・03・05・06は、方形または長方形を基調とすること、垂直に掘り込まれること、互いに2～3mの距離を保ちながらSD-01の東側にまとまるなどの類似性から、共通の意図の基に掘られたと考えられる。出土遺物の時期はSD-01と同じ15世紀代と判断される。SK-03の覆土上層からは骨31.72gが出土した。SK-07は底面付近の壁がハングしている。灰白色粘土(VIII層)の採掘を意図した土壌の可能性があり、時期は出土遺物から古代である。SK-08は北半では長楕円形の土坑が密集した形状、南半では階段状を呈し、全体としては不整形なプランである。SK-07と同じくVIII層を掘り込んでおり、粘土を採掘した土壌の可能性もある。覆土上部でわずかにかわらけが出土したが、遺物の大半は古代の土師器である。

土壌・ビット一覧表

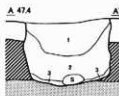
単位: m

番号	形態	長径	短径	深さ	出土遺物ほか
SK-01	不整形	1.15	1.09	0.32	かわらけ、土師器
SK-02	長方形	1.52	1.12	1.04	かわらけ、土師器、鉄釘
SK-03	方形	1.06	0.94	1.05	かわらけ、土師器、骨
SK-04	—	0.68	—	0.25	—
SK-05	不整形	—	0.92	0.55	かわらけ、古瀬戸
SK-06	長方形	1.56	0.95	0.96	かわらけ、古瀬戸、土師器
SK-07	—	2.62	—	1.23	土師器、須恵器 (南比金産)
SK-08	—	—	—	1.02	かわらけ、土師器
P-01	楕円形	0.43	0.34	0.49	—
P-02	不整形	0.74	0.60	0.41	—

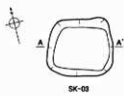
番号	形態	長径	短径	深さ	出土遺物ほか
P-03	楕円形	0.59	0.45	0.56	—
P-04	不整形	0.30	0.27	0.57	—
P-05	不整形	0.45	0.39	0.40	—
P-06	円形	0.36	0.33	0.40	—
P-07	—	0.40	—	0.52	SK-06を切る。
P-08	不整形	0.60	0.56	0.51	—
P-09	不整形	0.45	0.43	0.36	—
P-10	楕円形	0.55	0.44	0.54	—
P-11	長方形	0.34	0.24	0.54	—
P-12	—	—	—	0.40	SK-05を切る。



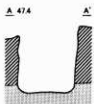
SK-02



A 474



SK-03



A 474



SK-04



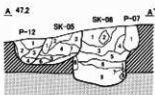
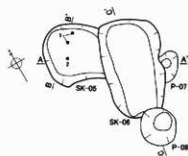
A 474

## SK-02 土層説明

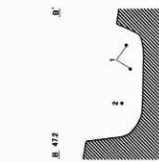
- 1 黒褐色土 粘土質。灰白色粘土ブロック、ローム粒、炭化粒、焼土ブロックを多量に、小石、かわらけ片を少量含む。
- 2 黒褐色土 粘土質。ロームブロックを多量に、灰白色粘土ブロック、炭化粒を少量含む。
- 3 灰白色粘土 ローム粒、小石を少量含む。

## SK-04 土層説明

- 1 黒褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に含む。



A 472



B 472



C 472

## SK-05 土層説明

- 1 褐灰色土 ローム粒を少量含む。
- 2 褐灰色土 ローム粒、炭化粒を少量含む。
- 3 褐灰色土 ローム粒を多量に含む。
- 4 褐灰色土 ローム粒、褐鉄鉱を多量に、白色粘土粒を少量含む。
- 5 褐灰色土 ローム粒、白色粘土粒を少量含む。
- 6 褐灰色土 白色粘土ブロックを多量に、褐鉄鉱を少量含む。
- 7 褐灰色土 褐鉄鉱を多量に、ロームブロックを少量含む。

## SK-06 土層説明

- 1 灰白色粘土 褐灰色土を少量含む。
- 2 褐灰色土 灰白色粘土粒を少量含む。
- 3 褐灰色土 灰白色粘土ブロックを多量に、ローム粒を少量含む。
- 4 褐灰色土 ローム粒、灰白色粘土ブロックを多量に含む。
- 5 灰白色粘土 白色粘土ブロックを多量に、褐灰色土を少量含む。
- 6 灰色粘土 灰白色粘土粒、灰色粘土粒を少量含む。
- 7 灰色粘土 ローム粒を多量に、灰白色粘土粒、灰色粘土粒を少量含む。
- 8 ロームブロック 灰白色粘土ブロックを少量含む。
- 9 灰白色粘土 灰色粘土ブロック、白色粘土ブロック、ロームブロックを少量含む。

## P-07 土層説明

- 1 褐灰色土 ロームブロックを多量に含む。

## P-12 土層説明

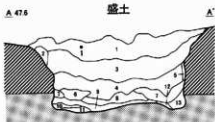
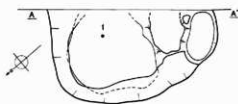
- 1 褐灰色土 ローム粒、焼土粒を少量含む。
- 2 褐灰色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 褐灰色土 ローム粒、焼土粒、白色粘土粒を少量含む。
- 4 褐灰色土 ローム粒を少量含む。



SK-01

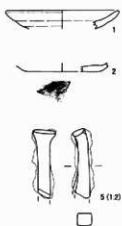


図12 SK(1)

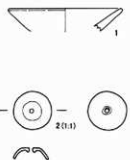


SK-07 土層説明

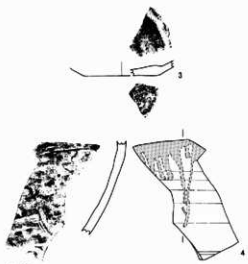
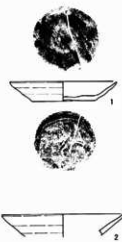
- 1 黒褐色土 白色バミスを少量含む。
- 2 黒褐色土 ローム粒を多量に、白色バミスを少量含む。
- 3 黒色土 ローム粒、白色バミスを少量含む。
- 4 黒褐色土 ローム粒、ロームブロック、白色粘土粒を少量含む。
- 5 ローム粒 黒褐色土を少量含む。
- 6 ロームブロック
- 7 灰黄褐色土 ローム粒、ロームブロックを多量に、白色粘土粒を少量含む。
- 8 灰色粘土 灰黄褐色土を少量含む。
- 9 灰黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に含む。
- 10 灰黄褐色土 白色粘土ブロックを多量に含む。
- 11 灰色粘土 灰黄褐色土を少量含む。
- 12 灰黄褐色土 白色粘土粒を多量に含む。
- 13 灰黄褐色土 ローム粒、白色粘土粒を多量に含む。



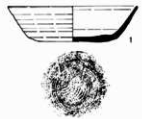
SK-02



SK-03



SK-05



SK-07



図13 SK(2)

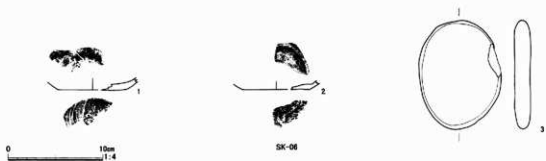


図14 SK(3)

SK-01

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 (11.4) 底径 (7.0) 器高 2.5	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	雲母・赤褐色粒 内外一にぶい橙色	小片。

SK-02

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 (12.0) 底径 — 器高 —	口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部ロクロ整形。	雲母・赤褐色粒 内外一にぶい橙色	小片。
2	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (8.0) 器高 —	見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。	雲母・赤褐色粒 内外一にぶい橙色	小片。
3	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (7.8) 器高 —	—	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。見込み中央直線的なユビナデ。	雲母・赤褐色粒 内外一にぶい褐色	底部1/4残存。
4	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 6.0 器高 —	糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。見込み螺旋状ロクロ目。	雲母 内外一にぶい黄褐色	底部1/2残存。
5	鉄	釘 残存長3.7 幅0.6~0.8 厚さ0.6~0.7 重さ7.91g	—	—	—	—

SK-03

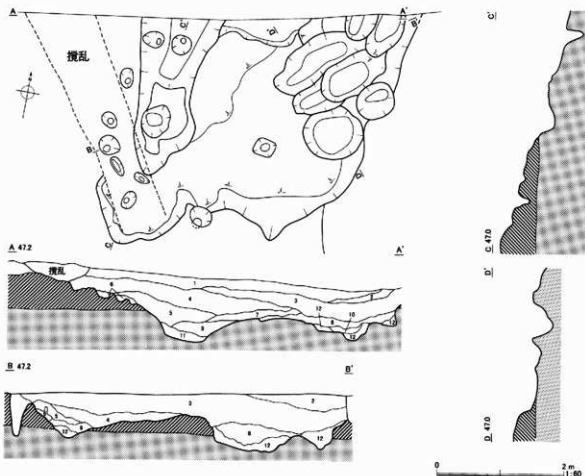
No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 (12.0) 底径 — 器高 —	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	体部ロクロ整形。	雲母 内外一にぶい黄褐色	小片。
2	副製品	径1.0 高さ0.3 厚さ0.1 孔径0.1 重さ0.31g	—	—	—	—

SK-05

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 11.4 底径 6.6 器高 2.1	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で緩やかに外反する。見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。	チャート・角閃石 内外一橙色	口縁部1/4欠。
2	中世土器 かわらけ	口径 (13.0) 底径 — 器高 —	口縁部は直線的に立ち上がり、中位で緩やかに外反する。	体部ロクロ整形。	雲母 内外一にぶい褐色	口縁部~体部1/4残存。
3	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 (8.0) 器高 —	見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	雲母・赤褐色粒 内外一にぶい褐色	底部1/6残存。
4	古瀬戸 瓶	—	—	内面ナデ。	白色粒 内面一灰黄 外面一灰オレンジ色	胴部小片。

SK-06

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 (7.0) 底径 — 器高 —	—	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。	雲母 内外一にぶい褐色	底部1/3残存。
2	中世土器 かわらけ	口径 (7.0) 底径 — 器高 —	底部中央器壁薄い。見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り。	チャート・白色粒 ・赤褐色粒 内外一褐色	底部1/5残存。
3	石	長さ11.3 幅8.8 厚さ1.7 重さ283.42g。表面摩滅する。	—	—	—	輝石安山岩。



#### SK-08 土層説明

- 1 灰黄褐色土 ローム粒を多量に、焼土粒、小石、土器片を少量含む。
- 2 灰黄褐色土 ロームブロック、白色粘土ブロックを多量に、白色バミスを少量含む。
- 3 黒褐色土 白色バミスを多量に、ローム粒、焼土粒、土器片を少量含む。
- 4 灰黄褐色土 ロームブロックを多量に、白色粘土ブロック、白色バミスを少量含む。
- 5 灰黄褐色土 ローム粒を多量に含む。

- 6 ロームブロック 灰黄褐色土を多量に含む。
- 7 褐灰色土 ローム粒、白色バミスを少量含む。
- 8 褐灰色土 ロームブロックを多量に、白色粘土ブロックを少量含む。
- 9 ぶい黄褐色土 ローム粒を少量含む。
- 10 灰黄褐色土 白色粘土ブロックを多量に、ローム粒を少量含む。
- 11 褐灰色土 ローム粒を少量含む。
- 12 ぶい黄褐色土 白色粘土ブロックを多量に、ローム粒を少量含む。

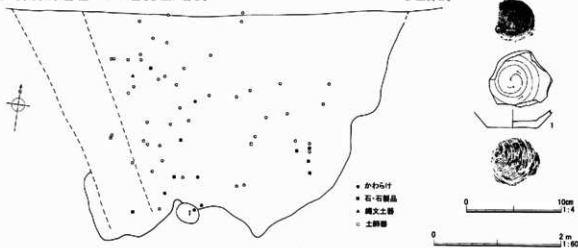


図15 SK-08

## SK-07

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	須恵器 坏	口径 (13.8) 底径 7.5 器高 3.8	膨らみのない体部。底部は平底。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り後に周縁部回転篦削り調整。	海綿骨針 内外一灰色	口縁部1/3欠。

## SK-08

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	中世土器 かわらけ	口径 — 底径 5.4 器高 —	見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。見込み螺旋状ロクロ目。	赤褐色粒 内面一に濃い黄褐色 外面一橙色	底部4/5残存。

## (4) 遺構外出土遺物

4・5は縄文土器、1～3、6～8は弥生土器である。9～14は古墳時代の土師器であるが、試掘調査で出土した9～11はSI-02に帰属する可能性がある。14は胴部に隆帯を貼付した壺形土器である。15～22は中世のかわらけで、SD-01や土壇出土のものと同種である。23・24は縄文時代の石器、25・26は時期不明の鉄製品であるが、25はSK-02の鉄釘と酷似している。

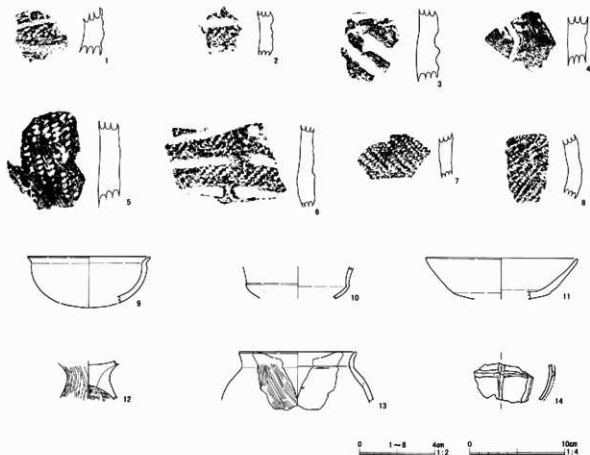


図16 遺構外出土遺物(1)

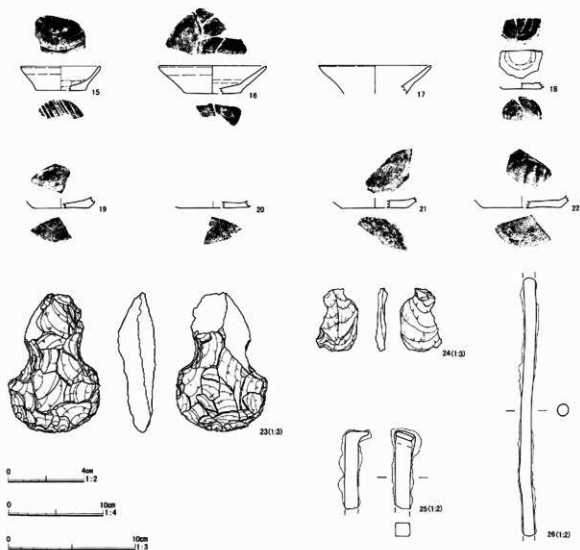


図17 遺構外出土遺物(2)

遺構外出土遺物

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
1	弥生土器		器面荒れる。	外面—LR 縄文施文後棒状工具による横位沈線。	片岩・チャート にふい褐色	SI—02覆土中。
2	弥生土器		器面荒れる。	外面—LR 縄文施文後棒状工具による横位沈線。	白色粒 にふい褐色	SK—07覆土中。
3	弥生土器		器面荒れる。	外面—棒状工具による横位・斜位沈線。縄文施文か。	角閃石 明灰黄色	SI—02覆土中。
4	縄文土器 深鉢			外面—棒状工具による斜位沈線。内面—磨き。	片岩 明赤褐色	SI—02掘り方。
5	縄文土器 深鉢			外面—単節 RL 縄文施文後縦位隆帯貼付。内面—磨き。	片岩・チャート にふい黄褐色	SK—07覆土中。
6	弥生土器			外面—単節 LR 縄文施文後棒状工具による横位・斜位沈線。内面—磨き。	片岩・チャート 明赤褐色	SI—02覆土中。
7	弥生土器			外面—単節 RL 縄文施文。	石英・礫 褐色	
8	弥生土器			外面—単節 LR 縄文施文。	片岩 にふい赤褐色	SI—02覆土中。

No	器種	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	調整手法の特徴	胎土・色調	備考
9	土師器 環	口径(13.0) 底径— 器高(5.4)	丸底。体部は彎曲し、口縁部は短く外傾。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラクスリだが摩滅。内面—口縁部ヨコナデ、体部へ底部摩滅。	片岩・チャート・赤褐色粒 内外—明赤褐色	トレンチ。 1/6残存。
10	土師器 環	口径— 底径— 器高—	体部と口縁部を直す稜線から、口縁部は外反気味に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ、体部ヘラクスリ。内面—口縁部ヨコナデ。	雲母 内面—いぶい黄色 外面—いぶい黄褐色	トレンチ。 外面赤彩。小片。 坏部1/6。
11	土師器 高環	口径(16.0) 底径— 器高—	坏部は平底から稜をもって内彎気味に立ち上がる。	外面—口縁部ヨコナデ。 内面—口縁部ヨコナデ。	片岩・赤褐色粒 内面—明赤褐色 外面—いぶい赤褐色	トレンチ。 坏部1/6。
12	土師器 高環	口径— 底径— 器高—	脚部「ハ」字状に開く。	外面—脚部ヘラケンマ。内面—坏部ヘラケンマ、脚部ハケメ後ヘラナデ。	雲母・赤褐色粒 内外—いぶい黄色	SD—01覆土中。 脚部2/3。
13	土師器 甕	口径(12.4) 底径— 器高—	口縁部は短く外反する。	外面—口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ。内面—口縁部ヨコナデ、胴部ナデ。	チャート・白色粒 内面—いぶい黄褐色 外面—いぶい黄色	SK—03覆土中。 小片。
14	土師器 甕	口径— 底径— 器高—	胴部は横方向に1本、縦方向に2本の隆帯を施す。	外面—胴部ヘラクスリ後に隆帯貼り付け。内面—胴部ユビナデ。	雲母・チャート 内外—いぶい黄色	SD—01覆土中。 小片。
15	中世土器 かわらけ	口径(8.4) 底径(5.3) 器高2.5	口縁部は内彎気味に立ち上がる。	体部ロクロ整形。底部回転糸切り後に、板状圧痕。見込みに指頭痕。	雲母・赤褐色粒 黒色粒 内外—いぶい黄色	1/4残存。
16	中世土器 かわらけ	口径(11.4) 底径(5.8) 器高2.9	体部は直線的に立ち上がる。見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。	雲母・赤褐色粒 内外—明赤褐色	トレンチ。 1/5残存。
17	中世土器 かわらけ	口径(12.0) 底径— 器高—	口縁部は緩やかに外反して立ち上がる。	体部ロクロ整形。	片岩・チャート・赤褐色粒 内面—いぶい黄褐色 外面—いぶい黄色	小片。
18	中世土器 かわらけ	口径— 底径4.2 器高—	糸切り痕周縁は高台状に小さく立ち上がる。見込み周縁部窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。	雲母・赤褐色粒 内外—いぶい黄色	底部1/2残存。
19	中世土器 かわらけ	口径— 底径(6.0) 器高—		体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。	雲母・赤褐色粒 内外—いぶい黄色	底部1/4残存。
20	中世土器 かわらけ	口径— 底径— 器高—		底部回転糸切り。	赤褐色粒 内外—いぶい黄褐色	トレンチ。 底部1/6残存。
21	中世土器 かわらけ	口径— 底径(7.0) 器高—		体部ロクロ整形。	片岩・チャート・赤褐色粒 内外—黄色	底部1/3残存。
22	中世土器 かわらけ	口径— 底径(8.4) 器高—	見込み周縁部わずかに窪む。	体部ロクロ整形。底部左回転糸切り。	雲母 内外—いぶい黄褐色	底部1/4残存。
23	打製石斧	長さ10.9 幅7.7 厚さ3.0 重さ177.29g	分銅型			黒色頁岩。
24	銅片	長さ5.0 幅3.3 厚さ0.9 重さ9.72g				SI—02覆土中。
25	鉄釘	残存長4.1 幅0.8 厚さ0.7 重さ10.77g				
26	鉄製品	残存長13.7 幅0.6 厚さ0.6 重さ26.95g				



## V まとめ

今回の調査で得られた成果と残された課題を以下に挙げ、まとめとしたい。

昭和31年・36年調査の東五十子城跡遺跡では、古墳時代中期の住居が6軒確認されており、豊富な鉄製農具が出土したことで知られていた<sup>1)</sup>。本遺跡のSI-02はその住居群の北西50mの位置にあり、同一の集落を形成したとみられる。遺構外14の壺形土器は胴部に隆帯を付したもので、類例は山梨県甲府市榎田遺跡<sup>2)</sup>、群馬県前橋市公田東遺跡<sup>3)</sup>・荒砥二之瀬遺跡<sup>4)</sup>、茨城県水戸市安戸星古墳<sup>5)</sup>、福島県会津坂下町男壇遺跡<sup>6)</sup>などに求められる(図18)。これらは古墳時代前期の周溝墓や前方後方墳から出土し、とくに榎田遺跡や公田東遺跡では底部が穿孔されることから、墳墓に供献された土器と考えられる。群馬県榛名町稲荷森遺跡<sup>7)</sup>では、弥生時代後期の土器と共存する事例も報告されている。本遺跡周辺に弥生時代後期から古墳時代前期の墳墓は知られていないことから、その位置付けが今後の課題である。

SK-07・08は白色粘土(VIII層)を採掘した可能性が考えられる中世以前の土壌である。とくにSK-08は崖の斜面を利用した大がかりなものである。本遺跡の西300mには、馬形埴輪や家形埴輪を出土した赤坂埴輪窯跡が知られるが、SK-07・08がその粘土供給源である確証は得られなかった。

中世の遺構は溝1条と土壌5基が確認された。溝と土壌は出土遺物から15世紀を主体としており、覆土上層の類似からも、これらの遺構が比較的近い時期のものであることが窺われる。SD-01は南端が土橋状に立ち上がることから、崖への排水を意図した用水路とは考えにくい。SD-01を西限として土壌が分布する状況から、何らかの区画性をもって掘削された溝とみられる。土壌はSK-03で骨が出土したが、覆土上層であるため、墓塚とは判断できなかった。

本遺跡は五十子城跡の本丸推定地の北西150m付近に位置し、二の郭北東端部にある(図19)。中世の遺構はこの五十子城跡の一部を構成するとみられるが、具体的にどのような空間であったかは今後に残された課題である。少なくとも多くのかかわりが消費される空間であったことは言えそうである。なお上野から武蔵にかけてのかかわりには、山内上杉氏系と言われる扁平な一帯が存在するとの指摘があるが<sup>8)</sup>、本遺跡のかかわりにも同様のものが存在することを最後に付記しておきたい(SD-01の3・9など)。

### 註

- <sup>1)</sup> 『本市史 資料編』1976本市 10号住居地から斧2点、鎌4点、鎌3点、鋳2点などが出土。
- <sup>2)</sup> 『榎田遺跡』1995山梨県教育委員会 第3号方形周溝墓から1点、第4号方形周溝墓から2点出土。赤彩、底部穿孔。
- <sup>3)</sup> 『豊島川端・公田東・公田池尻遺跡』1997(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 I区1号周溝墓(前方後方形)から1点出土。底部穿孔。
- <sup>4)</sup> 『荒砥二之瀬遺跡』1985(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 方形周溝墓から1点出土。
- <sup>5)</sup> 『常陸安戸星古墳』1982安戸星古墳調査団 前方後方墳、墳長28.3m。
- <sup>6)</sup> 『阿賀川地区遺跡発掘調査報告書』1990会津坂下町教育委員会 第1号周溝墓(方形周溝墓)から出土。隆帯に刻みが入る。
- <sup>7)</sup> 飯島克巳『榛名町稲荷森遺跡出土の弥生時代後期系土器』『群馬考古学手帳2』1991群馬土器観覧 5A号住居地貯蔵穴から1点出土。
- <sup>8)</sup> 田中 信『川越市埋蔵文化財発掘調査報告書(X1)』1996川越市教育委員会  
浅野 春樹『東国における在土土器の生産と流通』『戦国時代の考古学』小野正敏・萩原三雄編2003高志書院

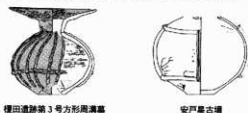


図18 胴部に隆帯を有する土師器の類例(1:8)



図19 五十子城跡(梅沢久夫『城郭資料集成 中世北武蔵の城』2003岩田書院に加筆・50%縮小)

# 写 真 图 版





東五十子城跡遺跡と周辺の地形 (国土地理院、平成12年10月撮影)



遺跡西側全景



遺跡東側全景



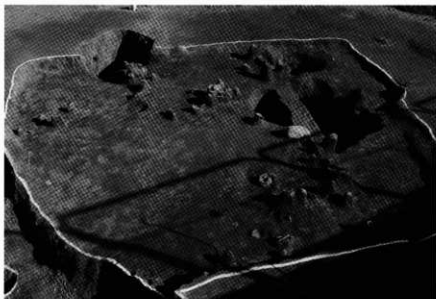
S I - 01



S I - 02



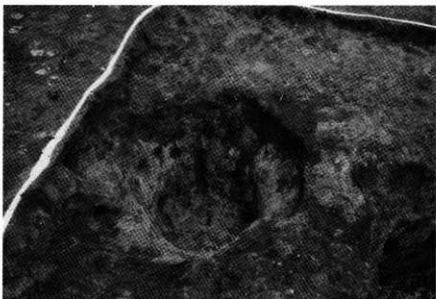
S I - 02 掘り方



S1-02 遺物検出状況



S1-02 遺物検出状況



S1-02 貯蔵穴



SD-01



SD-01 セクション



SD-01 遺物検出状況





SD-01 遺物検出状況



SD-01 遺物検出状況



SK-02



SK-03



SK-05



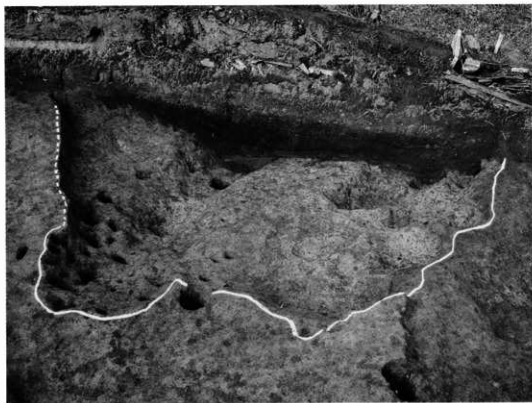
SK-06



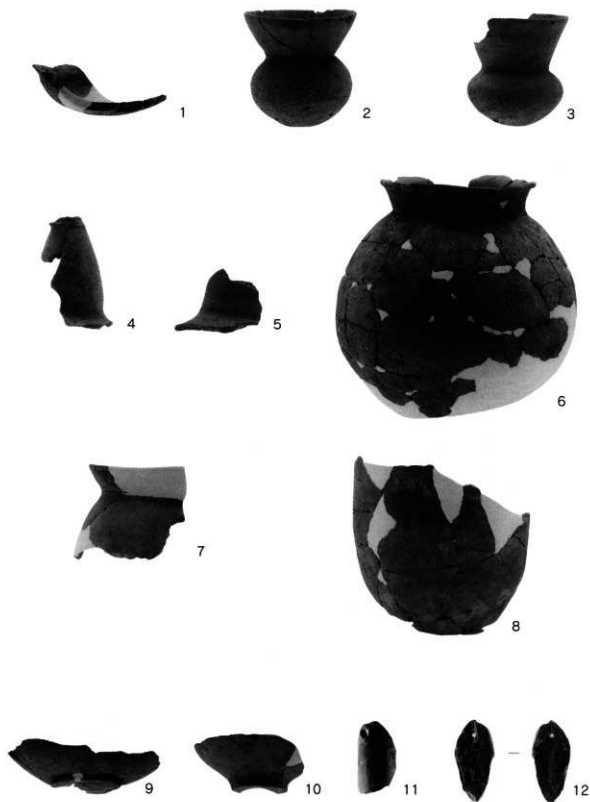
SK-07

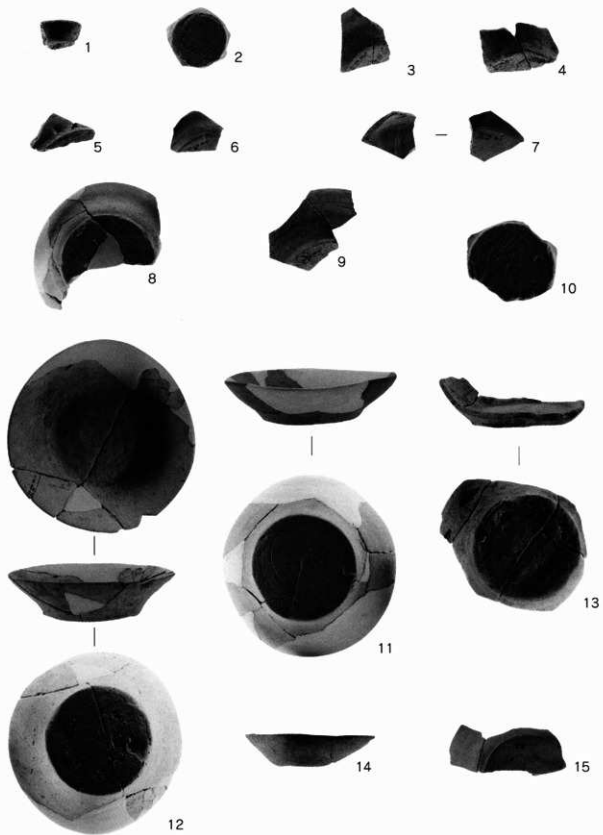


SK-08



SK-08







18



16



17



20



19



21

SD-01②



1

SK-01



1



2



3

SK-03



1



3



3



2



4



4



5

SK-02



SK-05



SK-06



SK-07



SK-08

遺構外①





9



10



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしいかっこしろあといせき							
書名	東五十子城跡遺跡							
副書名	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ移動通信用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	本庄市遺跡調査会報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	常深尚							
編集機関	本庄市遺跡調査会							
所在地	〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号 本庄市教育委員会内 電話0495-25-1186							
発行年月日	西暦2004(平成16)年5月25日							
所取遺跡	所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東五十子城跡遺跡	埼玉県本庄市大字東五十子城跡747番4,746番3	112119	035	36°13'46"	139°12'57"	20031203～ 20031224	217.09	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモが計画する移動通信用鉄塔建設
所取遺跡	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
東五十子城跡遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代前～中期 奈良・平安時代 中世		竪穴住居 2、溝 1 土壇 8、ピット 12		縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 かわらけ、陶器、土製品 石製模造品、石器、板碑 銅製品、鉄製品		

---

本庄市遺跡調査会報告 第11集

## 東五十子城跡遺跡

株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ移動通信  
用鉄塔建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

---

平成16年5月20日 印刷

平成16年5月25日 発行

発行／本庄市遺跡調査会

〒367-8501 埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号

本庄市教育委員会内

電話 0495-25-1186

印刷／朝日印刷工業株式会社

